

優秀賞

もしもの日と、やさしい備え

滋賀県 草津市立草津中学校 一学年

奥村 俊亮

ある日の夜、テレビで流れていたニュースに僕は目を奪われた。高速道路で起きた大きな事故。乗っていた家族全員が亡くなったという。画面には、おもちゃの落ちた車の座席や、ぬれたぬいぐるみが映っていた。『この家族、ついさつきまで笑ってたんやろな。』そんなことを思ったとき、胸の奥がきゅっと苦しくなった。僕はそれまで「死」というものをあまり考えたことがなかった。もちろん、道徳の授業やニュースでは見聞きする。でも、自分には関係のない遠い世界の話のように思っていた。けれど、その日見たニュースは、いつもの日常が一瞬で消えてしまうことがあると教えてくれた。

次の日、たまたま学校で避難訓練があった。地震を想定した訓練だったけれど、先生が言った言葉が心に残っている。「もしもはいつか本当になるかもしれないせん。」その「もしも」を考えることが不安に備える第一歩なのだと思うた。そしてその夜、僕はふと家でこんな質問をした。「うちって保険入ってるん？」母はちよつと驚いた顔をしてから「入ってるよ。いろいろと。なんで？」と聞き返してきた。「いや昨日のニュースで。」と説明すると、母は少し真剣な顔になった。「保険ってね、何かが起こったときに、心まで守ってくれるわけじゃない。でもお金のことで困らせないようにしてくれる。そういう見えない安心なんやと思う。」母の言葉は、どこか切なくあたたかかった。

そのあと、僕は「生命保険」について本やインターネットを調べてみた。保険料を払うことで、万が一のときに大きなお金が出る仕組み。それは残された家族が生活を続けられるようにするための備えだった。さらに知って驚いたのは、日本ではほとんどの家庭がなんらかの生命保険に入っていること。でも、その内容を理解していない人も多いらしい。

なんとなく思った。保険って「今日を安心して生きるための、未来への約束」なんじゃないか。たとえば、自転車で通学しているとき、いつ誰にぶつかるかわからない。家にいるときでも、地震や火事が起きるかもしれない。そんな「何が起こるか分からない毎日」の中で人は少しでも安心してたくて、保険という仕組みをつくったのだろう。

僕は、まだ中学生だし、保険に入ることもできない。でも母がそうしてくれることに、ありがたうと思った。「何も起きないように」と祈る気持ちと「何かあっても大丈夫」という備え。両方がそろって、やっと安心して生きていけるのかも

第63回中学生作文コンクール

しない。

命の価値は、お金では測れない。だけど、もしものときに助けられるものがあるなら、それを「冷たいもの」だと決めつけたくない。生命保険は大切な人へのやさしい手紙みたいなものだと思う。

「明日、もし自分や家族に何かあったら」

それを考えることは、少しこわい。だけど、そのこわさから目をそらさずに、「どう生きたいか」「どう守りたいか」を考えるのが、本当の意味で大人になるということなのかもしれない。

僕も、いつか家族を持ったときは、生命保険のことをしっかり考えよう。それはただの契約ではなく、心の中にある「守りたい」という気持ちを形にする方法だから。